

平成 26 年 5 月 19 日現在

機関番号：13301  
研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2011～2013  
課題番号：23720025  
研究課題名(和文) マハーヌヴァブ派における初期聖典の研究

研究課題名(英文) A Study on Early Mananubhav Scriptures

研究代表者

井田 克征 (IDA, Katsuyuki)

金沢大学・国際文化資源学研究センター・客員研究員

研究者番号：60595437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、13世紀以降のマハーラーシュトラにおいて発展した、大衆的クリシュナ信仰の一派であるマハーヌバヴ派の初期の聖典『スートラ・パート』および『スムリティ・スタル』を分析し、この教団の初期の信仰のあり方を明らかにした。最高神が聖者として地上に顕現するという同派の教説は、実在した聖者に熱烈な帰依を捧げる地方的なバクティの宗教の中心概念として、その後の民衆的ヒンドゥー教の展開に大きな役割を果たすことになった。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I examined hindu scriptures such as the Sutrapath and Smrtisthal of the Mahanubhav sect developed in Maharashtra after 13th century. The sect's theory of avatars --- a manifestation of the supreme God(parameshvar) descended to the earth as a human --- became a fundamental concept of their saint worship. Then this concept also played an important roll in the later development of local and popular Hinduism in this area.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、印度哲学・仏教学

キーワード：マハーヌバヴ バクティ マラーティー語 ヒンドゥー教 聖者 インド インド哲学 宗教学

## 1. 研究開始当初の背景

横笛を吹き、牛飼いや女たちと戯れる優美な姿によりインドで広く親しまれるクリシュナ神は、中世以降のヒンドゥー教の展開において、信徒達の熱情的な帰依(バクティ)の対象として重要な位置を占めるに至った。当初は正統ヒンドゥー教の枠の中で展開したこのクリシュナ神信仰は、12世紀頃から大衆化・地方化の動きを見せるようになる。それまで主にバラモン知識人たちによって、サンスクリット語の聖典の中で発展してきたこの神に対する帰依思想は、イスラームの侵入に前後して、インド各地のローカルな信仰や非バラモンの伝統と接近・習合するに至る。

この時期に流行した新しい地方的な帰依の宗教の多くは、それまでのヴェーダ的な祭式主義や、ウパニシャッド的な知と瞑想の宗教からは距離をとって、その代わりに唯一なる神への帰依のみを強調する。そしてその実践的表現として宗教歌や祭礼、聖地巡礼などが重視され、サンスクリット語よりは地方言語が用いられ、非バラモン階層を多くまきコンテ展開された。そうした新しい信仰においては、人びとはクリシュナ神をローカルな神格や聖者と同一視した。

本研究の主題となるマハーヌバーヴ派もまたマハーラーシュトラ地方において展開した、大衆的・地方的クリシュナ神信仰の一つである。13世紀にチャクラダルのによって興されたこの派は、非バラモン階層の人々を中心に展開し、マラーティー語のみを用いて、現在まで伝統を保持してきた。クリシュナ神を筆頭とする五つの化身(アヴァタール)に対する熱情的な帰依により特徴付けられるマハーヌバーヴ派の教義と実践の体系は、それ以降の同地方の大衆宗教の発展を方向付けるものとなり、ひいては現代のマハーラーシュトラ州の宗教文化の基層をなす重要なものであるにも関わらず、これまではまったく研究が行われていないままであった。

## 2. 研究の目的

こうした状況を鑑みて、本研究ではマハーヌバーヴ派の初期聖典『スートラ・パート』と『スムリティ・スタル』(共に14ct.)にもとづいて、同派の基本的な神学理論の枠組みを提示するとともに、同派の教団創成期のすがたを明らかにすることを意図している。

祖師チャクラダルの残した言葉を編纂したとされる教理書『スートラ・パート』には、同派の根本概念である「五つの化身」の観念と、この化身への帰依と救済の思想がまとめられているとされる。そして彼自身もまたクリシュナ神の化身であると見なされる祖師チャクラダルの死後、彼の後継者となったナーグデーヴの行状記でとしてまとめられた『スムリティ・スタル』は、ナーグデーヴが初期の教団をいかに牽引したかが詳らかに

されるのみならず、彼がチャクラダルの言葉を解釈して、一つのまとまった神学思想として体系化していった様子が見て取れる。

本研究では、マハーヌバーヴ派において重要な位置を占めているこの二つの資料の翻訳と分析を行い、まずは同派の基本的な教義がいかなるものであり、いかにして形成されたのかを明らかにし、さらに同時に当時の教団や宗教者達の生活の様子についても考察する。こうすることによって思想と実践の両側面から、いまだ多くを知られていないこの信仰集団の最初期の実像の一端を明らかにする。そしてさらには、それをサンスクリット語のプラーナ文献などに見られるバラモン文化の中で発達したクリシュナ信仰との対照を通じて、マハーヌバーヴ派と正統的ヒンドゥー教との関係性を探りたい。

## 3. 研究の方法

本研究において中心となるのは『スートラ・パート』『スムリティ・スタル』という二つの資料の翻訳と、その内容の分析である。マラーティー語で書かれたこれらの資料には、すでに古い刊本が存在するが、必ずしも信頼に足るテキストとは言い難い。ゆえに本研究では、現地調査を行ってマハーラーシュトラ各地のマハーヌバーヴ僧院や、個人によって所蔵される写本資料を収集して、それらの資料の読みを反映した校訂テキストを作成する必要がある。

すでに研究史の長いサンスクリット語資料とは異なって、マラーティー語の写本資料の中にはカタログ化されていないものも珍しくない。特にマハーヌバーヴ関係の資料は、その研究がほとんど存在しないこと、資料の書記法が暗号を用いた極めて特殊なものであることなどの事情から、その収蔵状況をはじめとする基本的な情報すらまとめられていないのが現状である。それゆえ本研究では、まず重要な古写本の所在等をカタログ化し、その中で本研究に役立つものを収集するという手続きを踏まなければならない。そうした作業においては、現地において連携する研究者の存在が極めて重要となる。

研究の進め方としては、研究初年度と二年目に現地調査を行い、上記のようなカタログ化・写本収集を行う。またその際には、現地の研究者やマハーヌバーヴ関係者との討議、インタビューを積極的に行い、資料のより正確な理解を試みる。

そして帰国後は、まず初年度には『スートラ・パート』のテキストの部分的校訂・翻訳を行って基本的な教義を押さえる。そして同様に二年目には『スムリティ・スタル』の部分的校訂と翻訳を行い、そこから初期の教団のあり方を考察する。最終年度は、現地調査は行わず、その代わりに一年を通じて上記の二つのテキストの校訂・翻訳を進め、さらにはこの信仰集団が初期の思想を体系化する

歳の経緯を明らかにすることに努める。

#### 4. 研究成果

本研究において、以下の成果が得られた。

(1) マハーヌバーヴ派の重要聖典『スートラ・パート』および『スムリティ・スタル』の重要箇所の新しい校訂テキストおよび、その予備的な和訳(『スートラ・パート』第1-8章および10, 12章など。『スムリティ・スタル』第1-108章および216-261章)。これはマハーラーシュトラにおけるヒンドゥー教の発展を考える上で欠かすことのできない基礎的な資料であり、今後より完全な翻訳へと発展させて、まとまった形で刊行することを目指す。

(2) 上記の文献研究にもとづいて、さらに『リーラー・チャリトラ』をはじめとする他のマハーヌバーヴ派聖典をも考慮に入れつつ、当時のマハーヌバーヴ派の教理および実践の実像を明らかにした。その主要な成果としては、次のようにまとめられる。

『スートラ・パート』の神観念と神への帰依

チャクラダル自身の説いた言葉を編纂したとされる『スートラ・パート』は、マハーヌバーヴ派の教理書として、同派において最も重要視される聖典の一つである。そこではシヴァやヴィシュヌといった通常のヒンドゥー教の神々にはあまり高い地位は与えられておらず、世界に遍在する最高神(パラメーシュワル)のみが唯一の救済者であると説かれている。この最高神は、地上に化身として姿を現して、人びとを救済する。この化身に関して、後のマハーヌバーヴ派ではクリシュナ神を筆頭として最後に祖師チャクラダルをおく「五つの化身」を認めるようになるのであるが、実は『スートラ・パート』においては「五つの化身」の観念は、明示的に示されていない。

本報告書でもすでに述べたとおり、一般的にマハーヌバーヴ派は最高神の化身に対する帰依(バクティ)の宗教と理解されている。実際に、『スムリティ・スタル』をはじめとして多くの聖典では、個人が神への帰依によって救済されることが繰り返し述べられているし、現代のマハーヌバーヴ達もそのように理解している。しかしながら、祖師チャクラダル自身の言葉とされる『スートラ・パート』の中では、実は必ずしも帰依のみが重要視されているわけではないのである。最高神の現前において知を獲得し、それによって業が滅して個人が解脱する(最高神と合一する)という『スートラ・パート』の解脱論は、サンスクリット的な解脱論の文脈を引き継いでおり、後のマハーヌバーヴ派に見られるような民衆宗教としての側面は、この時点ではそ

れほど強くないようにも思われる。

#### 救済論の変容

祖師チャクラダルは、地上に顕現した最高神の化身に個人が出会い、付き従うことによって業が消滅し、解脱を獲得するのだと主張する。マハーヌバーヴ派においては、チャクラダル自身が最高神の五番目の化身であると考えられているから、この主張はそのままチャクラダルへ帰依する信徒達の救済を約束するものと理解されることになる。

そうした師への帰依(グル・バクティ)の全面的な支持は、そのまま『スムリティ・スタル』に引き継がれるが、ここで一つの問題が生じる。それは祖師チャクラダルの死である。『スムリティ・スタル』の冒頭で説かれるのは、チャクラダルが死んだ直後の、彼に付き従う人びとの悲嘆の様子である。これまでの教説から考えれば、神の化身たる師チャクラダルの不在によって、人びとは救済の可能性を失うことになる。最高神の現前を失った教団はこれ以降、新たな神の現前を求める方向には向かわず、「神の非現前」における個人の救済という問題に取り組むことになったのであった。

その結果『スムリティ・スタル』では現前しない最高神と個人とが結び付き(サンバンダ)を獲得することによって救済がもたらされると考えるに至った。そしてこの結びつきを得る手段として、帰依が重視されるようになったのであった。直接向き合うことのできない、もはや現前しない神に対しては想起を用いて、自らの帰依を捧げる。また化身に所縁のある聖地巡礼や、後述される遺物崇拜なども、すべて神(の厳然たる化身)と個人との結びつきを確保するための実践として、理解されることになる。

#### ヴィシェーシュ崇拜について

現代のマハーヌバーヴ派を特徴付ける要素の一つとして、ヴィシェーシュ崇拜が挙げられる。ヴィシェーシュとは、通常は数センチから数十センチ程度の大きさをした持ち運び可能な黒い石である。それには、ある程度神像に近い形状をとるものもあれば、四角や丸い形をしたり、もしくは整形されない石そのままの場合もある。こうしたヴィシェーシュは寺院や信徒宅の祭壇にいくつも祀られ、人びとはそれに触れながら神に祈りを捧げる。

こうしたヴィシェーシュ崇拜の古い形は、おそらく『スムリティ・スタル』など初期の聖典の中にみられる遺物(プラサード)崇拜の中に求めることができるだろう。チャクラダルをはじめとする最高神の化身達は、折に触れて信徒に恩寵として何かの物品を下賜したとされている。これらの遺物は、化身が地上から去った後にも信徒と化身との結びつきをもたらすものとして、極めて重要な意

義を帯びるに至った。さらに師が触れたり座った場所が、師との結びつきを持つものとして崇拜されるようになると、そうした場所から切り出されたヴィシエーシュの崇拜へと発展していくことになった。

#### 帰依と悲嘆

チャクラダルの説く教理が、抽象原理としての最高神への帰依を中心とした、いわばエリートの救済論であったのに対して、チャクラダルが死んで以降のマハーヌバーヴ派では、去った師への帰依が、極めて具体的な行動として示される。暴力的にも帰依の対象を奪われた信徒達は、常にその場にはいない師(そして最高神)に対する哀別の念を示し、悲嘆に暮れつつ帰依を捧げる。そうした信徒達の態度は、チャクラダルに直接会ったことのない者たちの中にまで見出され、いわゆる別離のバクティの観念へと繋がっていくように思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

井田克征「マハーヌバーヴ派における遺物の崇拜について」『南アジア言語文化』査読無、7号、2013年、1-25頁。

井田克征「インドにおける旅と癒し トランバケーシュワルの事例を出発点に」『北陸宗教文化』査読有、25号、2012年、19-25頁。

〔学会発表〕(計 4件)

井田克征「聖者の条件」インド・チベット資料研究会、東北大学川内キャンパス、2014年3月5日。

井田克征「マハーヌバーヴ派における帰依と救済について」印度学宗教学会、2013年6月2日、駒沢女子大学。

井田克征「マラーティー聖者伝における神の不在について」バクティ研究会、2013年3月16日、拓殖大学文京キャンパス。

井田克征「Mahanubhav とはいかなる人びとか」マハーラーシュトラ研究会、2011年12月11日、東京外国語大学本郷サテライト。

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕  
ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

井田 克征 (IDA, Katsuyuki)

金沢大学・国際文化資源学研究中心・

客員研究員

研究者番号：60595437